
アタゴオルは猫の森
ますむら・ひろし
ATAGOUL is Cat's Forest
5
MFコミックス
フラッパーシリーズ
アタゴオルは猫の森
5
ますむら・ひろし
MEDIA FACTORY
MFコミックス
ISBN4-8401-0483-2
C9979 ¥514E
9784840104838
1929979005146
定価：本体514円(税別)
雑誌52641-83
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY
ヒデヨシの即興詩？
から始まった絶対鉱物〈テルウテ〉騒動。
ギリムリアに乗り込んだヒデヨシ、ツキミ姫、時士ら
アタゴオルの仲間達と脈旅団との争奪戦に
ギルバスも参加する中、
いよいよテルウテが姿を現した！ その秘めたる力とは？
その力を御する"王"とはヒデヨシのことなのか？
ギリムリアの暴君・万動元帥が動いたとき、
巨大な怪物、溶岩幽霊堂〈パンキオヤ〉が街を襲う!!
『テルウテ⑥〜⑫』など8編に、
作者による解説『アタゴオル余波5』を収録



## ますむら・ひろし

昭和27年生まれ
山形県出身。
昭和48年デビュー作「霧にむせぶ夜」が
「週刊少年ジャンプ」に掲載。
その後青林堂に入り
雑誌「ガロ」を舞台に活躍、独立後現在に至る。
平成9年には「アタゴオル玉手箱」で
日本漫画家協会賞大賞受賞。
宮沢賢治作品の漫画化にも意欲的に取り組み、
独自の感性で大胆に視覚化している。
中でも「銀河鉄道の夜」は
昭和60年、劇場アニメとして公開、
マンガファンだけでなく
宮沢賢治愛好家の間でも高い評価を得ている。

装画・ますむら・ひろし
装幀・多田和博＋岡田ひとみ
フォーマットデザイン・フィールドワーク

ATAGOUL is Cat's Forest

# アタゴオルは猫の森 5

ますむら・ひろし



# アタゴオルは猫の森 ⑤

ATAGOUL is Cat's Forest

# 第一話 テルウテ⑥




ヒデヨシ
おまえじゃ
絶対鉱物は
守り切れない
コラー
なに言ってんのよ
突然出て来て
泥棒
ギルバルスが
泥棒なのよォ
ギルバルス!!
こいつが
あのギルバルス
なのか


こんなデブ猫なら気合も入らないが
やっとまともな奴が来たな
なんだとォ
ヘメ
それより鉄砂あのよ
なにっおまえと組むだと⁉
そーよ
ギルバルスは凶暴な奴なのよっ
だから一緒にやっつけようぜ
貴様みたいな最低の奴と誰が組むかっ
あっそー
じゃ さっさとギルバルスにぶちのめされろ
まったくよ〜くっ判ってないなあ
ブツ
ブツ



判ってないのは
おまえだろ
鉄砂と組むなんてっ
最低の国の王様だな
違います
山は噴火するしっ
最高で――す
ギルバルス
オレは脈旅団の鉄砂だ
その絶対鉱物
腕ずくでいただくぜ
そいつは無理さ
!
あっ
うっ


これは!!
へっ
火山弾が鉄砂めがけて飛んでるぞ
欲しいっ
絶対鉱物最高ーっ
まったく凄いぜ
よこせっ
おっと
スキあり



輝石流歯岩は
オレの僕
うっ
ぐっ
あっ
さわるな
ヒデ丸
えっ


うわっ
ボッ
トン
イエ〜〜〜ッ
ヒデヨシ君 それ燃えますよっ
手の皮 厚いから 平気だよォ
やったあ
オレのものォ
くたばれ ヒデヨシ
キャッ
ヒエーッ


らっ
なんだ?
みんな止まってるぞ
ぺん
てめーっ待ってろよ


ホホホ
あった あった
鉄砂にギルバルスゆるさないわよおお
凄いなぁ
ホッホッホ
らん らん
噴火も止まったままだし
ということは
エヘエヘ
イエ〜〜〜ッ
ドドドド
ドスッ


あっ
カキッ
ヒデヨシ君が
消えた!!
これは
いったい!?
鉄砂
その顔
なに言ってんだっ
おまえの顔も
どういうことだ
ヒデヨシが
消えるなんて!?
たぶん
絶対鉱物の
能力だろう



消えるなんてありえない
ナバ 奴はどこに居る?
近くにいません
そんな馬鹿な
……さすが絶対鉱物だな
ああ
必ず私が手に入れる
ギルバルス また会おう
ああ
凄いな ギルバルス
絶対鉱物を知ってたんですね
いや
夢の中に蜘蛛が現れたんだ


蜘蛛!!
それにしてもヒデヨシ君どこに消えたんでしょうね
フーム
判らないのは一瞬にして消えたのに
どうして鉄砂やギルパルスの顔に落書きできたのか?
一瞬の中にも永遠がある
ヒデヨシはその隙間に入ったのかもしれない
一瞬の中の永遠…
鉱物にとっては100万年だって一瞬さ
絶対鉱物は



鉱物感覚の巣なんだ
ら
ドン
くっそ──っ 動き出したぞ
まあいいや
いえ〜〜っ あったぞォ
タダ食い魚屋発見


なにがタダ食い魚屋だ
おまえ見かけない顔だな
オレアタゴオルのヒデヨシだよ
金無いんだけど
タダで魚食わせてけろ
食わせるわけねーだろう
素直に食わせた方が君のためだよ
はぐはぐ
あっコラやめろっ
貴様これ以上食うとぶちのめすぞ
無理 無理
アンタオレをぶちのめせないぜ
体が動かなくなっちゃうのさ


だまれ
無銭飲食
痛で
このっ
このっ
ひえっ
やめろっ
天罰が
下るぞ
やかましい
天罰が下るのは
おまえだ
絶対鉱物
こいつを
ぶちのめせっ
助けて
くれえ
ピッ
らっ
止まった


コノヤロ
とんでもない
魚屋だ
ボン
ボン
よーし
みーーんな
食ってやるぜえ
ポイ
ら
なんだ?
透け透けの
変な鳥・・・
そういえば
おまえ
絶対鉱物を
かじっていた奴
だな


タコや魚食いたくて出て来たんだろう
あげないわよーっ
くっちゃ
あーっうんめえ
情ケナイ
絶対鉱物ヲ手ニ入レテヤルコトガ
魚屋ノ魚泥棒カ
なんだと透け鳥
ぶっとばすぞ〜〜〜っ
ソンナ体ニ王ガ住ムワケナイ
王なんかどーでもいいのよ
それより鳥


どうやったらみんなを止めたり動かしたり出来るんだ?
止マッテイルノデハナイ
オマエハ時間ノ隙間ニ入ッテイルノダ
時間のスキッ歯?
そんなことはどーでもイイからよ
パッと合図とかないの?
透け鳥様魚もタコも食べていいから教えてよォ
ナンダ コイツ ころっト態度ヲ変エル奴
デ入リ
デ出ル


ケムケとミムルモね
ナンダソレ？
ヒデヨシ文字だよ
ひでよし文字？
そーよオレとヒデ丸しか読めない高級文字よ
さーて食うぞォ
透け鳥おまえも食え
私ハイラナイ


うんめえぇ
しかし この絶対鉱物 ときどき ボーッと輝くな
蜘蛛の足 みたいにさ
うくくくっ 食った 食った
どーれ 合図でも やってみっか
とォ
あれ!? 貴様 なぜ そこに?
ホホホ
魚みーんな 食ったわよォ


なんだとォ
うわっ
どうして一瞬で!?
ゆるせん
絶対にゆるせん
泣くな魚屋
絶対鉱物は無敵なのよっ
ゴゴゴゴ
おわっ
ゴゴ
なんだあれは!?
ひでよし
アレハ


オマエガ呼ンダノダ
にゃっ オレが呼んだ?
オマエ…… コノ魚屋ニ 叩カレテ イタ時 言ッタダロウ
「絶対禁物 コイツヲ ブチノメセ」ト


らっ
それで出て来たのか
アレハ熔岩幽霊堂
オマエノ怒リニ反応シテ出現シタノダ
助けてくれえヒデヨシ様
ホホホ だから おとなしく 食わせれば よかったのよ
しっかし凄いなあ こいつがいれば…
イカニモ コノ大陸ノ完全ナル帝王ニ成レル
ぺっ
甘い
オレの望みはもおっと大きいぜっ
スルト コノ星全体ノ


そ——っ
世界中のタコが
オレのもの〜〜〜っ
ズドッ

# 第二話　テルウテ⑦




オオッ
熔岩の化け物ですよっ
絶対鉱物のせいだろう
素晴らしい
なんという怪物
ヒデヨシが呼び出したのでしょう
あのバカ猫か


しかし これで透明王も動き出します
ああ
奴の手に絶対鉱物が入らないうちに
……
ズズズッ
うわっ熔岩幽霊堂がこっちに来るぞ
そーよアンタをやっつけに来るのよ
早く止めてくれっヒデヨシ様
ほほほヨロシイ
よーしパンキライヤ止まれい

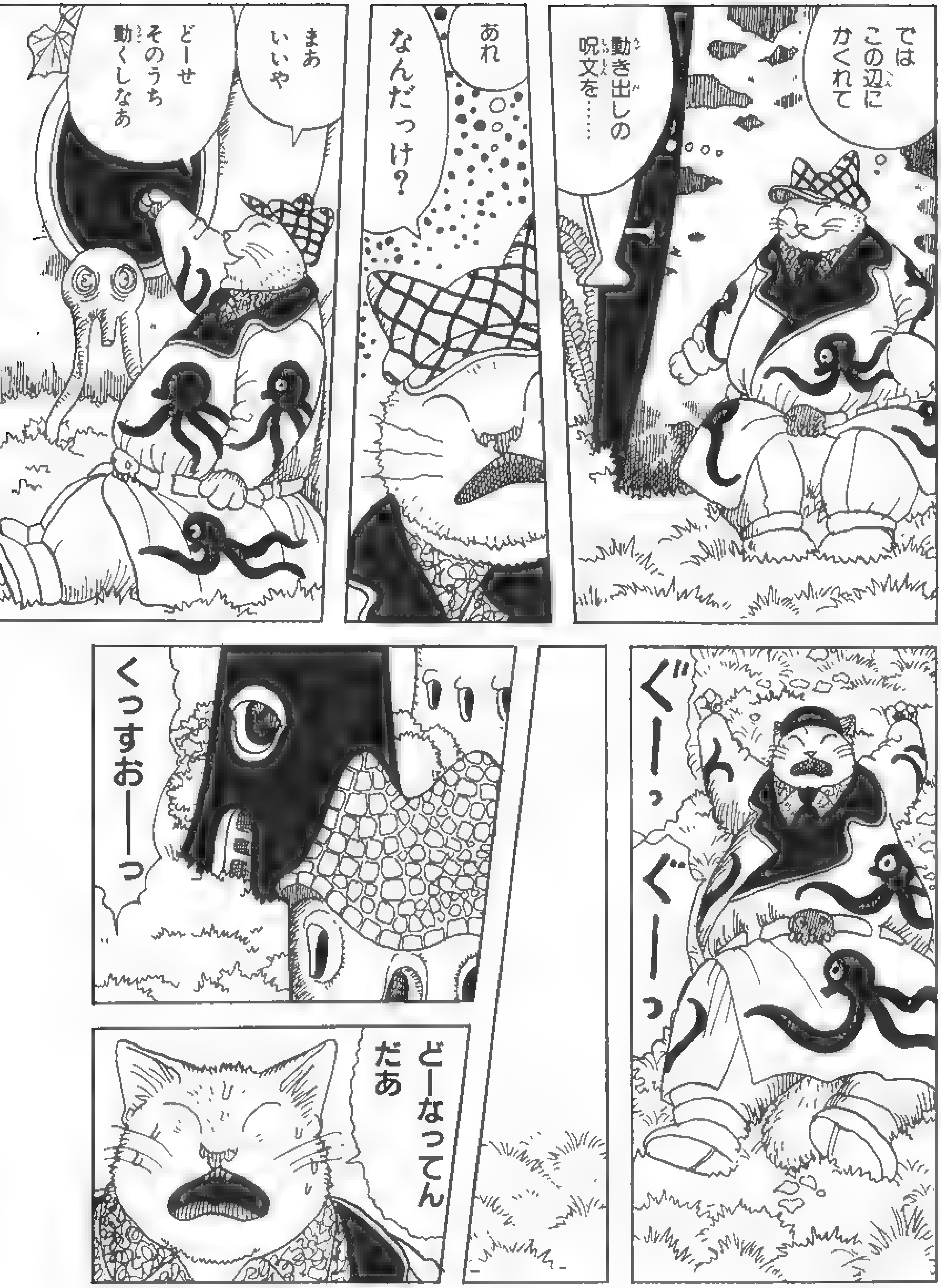

止まった
いーぞォ
これで完全に
世界中のタコはオレのものだあ
ナント望ミノ小サイ男
10日後
ここがギリムリア第2の都市モジモイ
ほんとにこの町に来てるんでしょうか
たぶんな


食い逃げされた店を転々と追ってきたらココに来たんだから
絶対いるわよ
ウドン屋を何軒かあたれば来たかどうか判るだろう
あれ
ずいぶんきびしいなあ
『ギリムリア法
無銭飲食は死刑』
ヒデヨシ君死にますよ
もう死刑になってんじゃないか
あっ


いたぞ
ずいぶん高そうな服きてますね
見つけたぞ
服の代金払え
しつこい親父だなあ


しーん
ホホホ
みーんな止まってる
ヒデヨシ君のォ好きな町ーーっ
なんでもかんでもタダの町ーっ
らっ
しーん
テンプラたちだ


オレを追いかけて来たんだな
平和にくらしているのにジャマな奴らだ
特にコイツがジャマ
「ヒデヨシタダ食いはこの町じゃ死刑なのよ」
「なに考えてんのよまったく」とか言うんだよなテマリめっ
タダ食いが
どれほど恐ろしいものか
おまえも味わうのじゃ


では この辺に かくれて
動き出しの 呪文を……
あれ
なんだっけ？
まあ いいや
どーせ そのうち 動くしなあ
ぐーっ ぐーーっ
くっすおーーっ
どーなってん だあ


なんべん寝ても動かないのよォ
寝れば寝るほど想い出せなくなるのよォ
コラ親父動いてくれえ
まさかオレずうっと止まったままの世界にいるんじゃねーだろうなあ
そーだ
透け鳥
どこにいるんだあ


助けてくれえ
透け鳥様
くっすお
みんな絶対鉱物のせいだ
コノヤロ
なんとかしろ
んっ
ギルバルス
飯なんか食ってないで助けてくれよっ


ところで なに食ってんだ?
アサリの 炊き込みご飯か
ら
安いけどコレ んまいんだよなあ
ずいぶん 豪勢じゃないの★
おっさん お呼ばれしますわよ
では さっそく




㊟「マゴド・アジツケダ」=マメ猫族語で「想い出した」


うっ
消えたっ
あっ
これは!!
貴様っ よくもワシの食事をっ
ギリムリア国王直属の万動元帥と知ってのふるまいかっ
違う
オレじゃない


考えてみてくれ
一瞬にしてこんなに食えるわけないだろう
やかましい
おまえの腹を開いてみれば判るだろう
オレの名はギルバルス
誓って言うがお主のものは食ってない
うるさい こいつをとらえろ
話の判らん奴だ
あっ
ドン
ドン


ほら
オレの食った分は払ったぜ
あっ
消えた
あれっ
リンゴがない
う
ぷっ
なんなのこのリンゴ
あっ リンゴ泥棒
ええっ 違います


なに言ってんだ
手の早い奴だ
ホントに
違うんです
やったのは
たぶん
ヒデヨシです
ヒデヨシ?
白い外套をきた
太った猫が
パッと消えたで
しょう
あいつが
ヒデヨシか
ええっ
イタズラばかり
する奴なんです
あいつのかじった
リンゴの代金は
オレが払いますから
そういうことなら
代金はいらないよ
ところで
親父さん


この国じゃ無銭飲食すると死刑なんですか
国王軍の万動元帥が議会に圧力をかけて決めたのさ
万動元帥
ホラ
この男だよ
なんだか食い物にいやしそうな顔だなあ
元帥は美食家でねえ……町の高級料理屋で無銭飲食しているのさ
はあ?
どうして金もらわないんですか
そりゃあアンタ


元帥の親衛隊「バリバラ」が恐ろしいからさ
翌日
あいつ～ドコにかくれているんだ
でっかい町だから捜すのはムズカシイぞ
あ
「ギルバルス この男 元帥の食事を横取りして食った不届き者」
「見つけしだい バリバラ局へ通報すべし」
ギルバルスが食事を横取りなんて



するわけないよ
たぶんヒデヨシのせいだ
ぐーーー
ぐーーー
オレたちゃ欠食ドラ猫団
都に来たぞっ
あっ
ギルバルスじゃないか
おまえたちギルバルスを知っているのか
オレの友だちだよ


ギルバルスの仲間だ
バリバラ本部に連行する
ひえーっ
こわいよォ
泣くなカツラ オレだってこわいんだ
ホントにおまえたちはギルバルスの居所知らないんだな


知りませーん
元帥
バッセル山の熔岩の化け物は動きを止めたままであります
あの化け物ね熔岩幽霊堂だよ
だまってろよも〜〜っ
パンキライヤだと
あれはどうして出て来たんだ?
それんまそうだな
それ食わせたら教えるぞ
ううっんめえ


アレが出て来たのは
絶対鉱物のせい
なのよっ
そーそーっ
ドドーーン
絶対鉱物!?
あっ…花火文字だ
…でもあいつ
字読めない
からなあ
「欠食ドラ猫団の
命を助けたければ」




第三話 テルウテ⑧



ドラネコ団に似た雲だわ
らっ
みんな泣いてるぞ
なんて泣いてるんだ?
しっかし楽な町だなあ
みんなセッセと働いてるのは
オレのためなのよねえ
「大食ドラネコ団の命を助けたければヒデヨシ出頭すべし」
でも彼は字読めませんからねえ


字読めたって出頭しないよアイッ
早いとこヒデヨシ君を見つけないと大変ですっ
あっ
ドラネコ団を3日後に処刑カ…
もしや貴方はギルバルスでは…？
いかにも
パリバラ局とやらに通報するのかい？
いえっ
この町の者はみんな万動元帥を嫌ってますから貴方は英雄ですよ
元帥の食事を横取りするとは痛快ですなあ



違うのよ──っ
ギルバルスじゃないのよ──っ
あっヒデヨシ
オッ
万動の飯食ったのはオレなのよォ
だからオレが英雄なのさ──っ
そんなことより空に浮かんだドラネコ団の雲を見たか
ああっカツラたちが泣いてたななんでだ?
万動につかまったんだ
おまえが出頭しないと3日後に処刑される
なんでオレが行くのさ
奴の狙いはたぶんおまえの持ってる絶対鉱物さ


おまえ出頭するか
するわけねーべよ
ギルバルス おまえ行って助けてこいよ じゃあネ
生きるということは
あいつをアテにしないことだな
ヒデヨシだ ヒデヨシがいるぞォ
あっコラッ なんで報せるのよーっ
オレは毎日 おまえにタダ食いされている鯨印ウドン屋だ
べっ つかまるもんかい
ケムケ


ほほほ
この町のものはみんなタダ〜〜〜ッ
服も食い物もオレのもの〜〜〜っ
ブロロロッ
イエーッ
ちわーっ
骨董屋って高いもんだなあ
こっけなツボが30金貨だとォ
お客様それは予約済みです


予約済み？
万動元帥は骨董収集に熱心でなあ
これから持っていくんだが
今までのもコレもお代はもらえない…
金 払わないだと!?
ええ
あの方にとって この町のものはみんなタダみたいなもので
許せん
タダはオレだけなのに〜〜〜っ
おやじ君 ワシはスミレ博士といって借金取り立ての研究をしているものじゃ
借金取り立ての研究？
今まで 完璧に取り立てている
ここはワシにまかせてくれたまえ
ホントですか？


フッ 骨董屋っ やっと持って きたな
すばらしい 漂ってくる風格
あーっワシは 取り立ての研究やっている スミレ博士じゃがのーっ
貴方 タダで骨董 集めちゃあ イカンよ
タップリたまってる 代金 払ってくれたまえ
貴様 誰に向かって そんな口をきいてるんだ
早いとこ払わないと
ガ
ホレ


うわっ
やめろ
ホレホレ
払わないと
みんな
こわすわ
よ〜〜っ
アンタ やめて
くれえ
払う
払うから
やめろっ
よーーし
ああっ
おまえはコレが
どれだけ貴重か
判らんのか
食えない物は
意味が無い
のじゃ
ひっ


元帥 大変です 熔岩幽霊堂が 動き出して この 都に向かっています
なんだと
ほほほ
さては オレを 助けに来たのかな
なに?
ホントだ こっちに向かって いる いつから 動き出したんだ?
変だなあ …オレの命令が ないと動かない のに
3時間前 から急に です
3時間前 からだと


まさか
絶対鉱物を持っている
オレの命令を
きかなくなったんじゃ
ないだろうな
コラーッ
熔岩幽霊堂
両手を上げて
止まれ――っ
ほほほ
止まった
おまえ
まさか
ヒデヨシ
絶対鉱物を
渡せ
ぐっ
ピ


そっけな銃より骨董品代払わないとヒドイ目に遭うわよォ
その頭に穴あけてやるぜ
くっ
うわっ
すげえ元帥がつるされてるぞォ
いったい誰がやったんだ
ヒデヨシぶち殺してやる


ヒデヨシ!? あの食い逃げ猫が
こんなことして済むわけないよなぁ
しかし一瞬にしてここにワシをつるすとは…
これも絶対鉱物の力か
なんとしても手に入れてやる
2日後
見つけたぞ
なんだプンプン・テマリか
アンタなにやってんのよ
ドラネコ団があと1時間で処刑されるのよ


アンタのせいでつかまったんだから助けに行くか出頭するかどっちかにしなさいよっ
どーーせ
ギルバルスが助けに行くからだいじょうぶだよ
このダラケ猫
ヒデヨシ紅マグロ5本やるから助けに行けよ
甘いなパンツ
この町の食い物はみんなタダなのよ紅マグロも銀クジラもきびウニもォ
アンタに頼むなんてムダね
パンツ君行きましょう
うえーーん

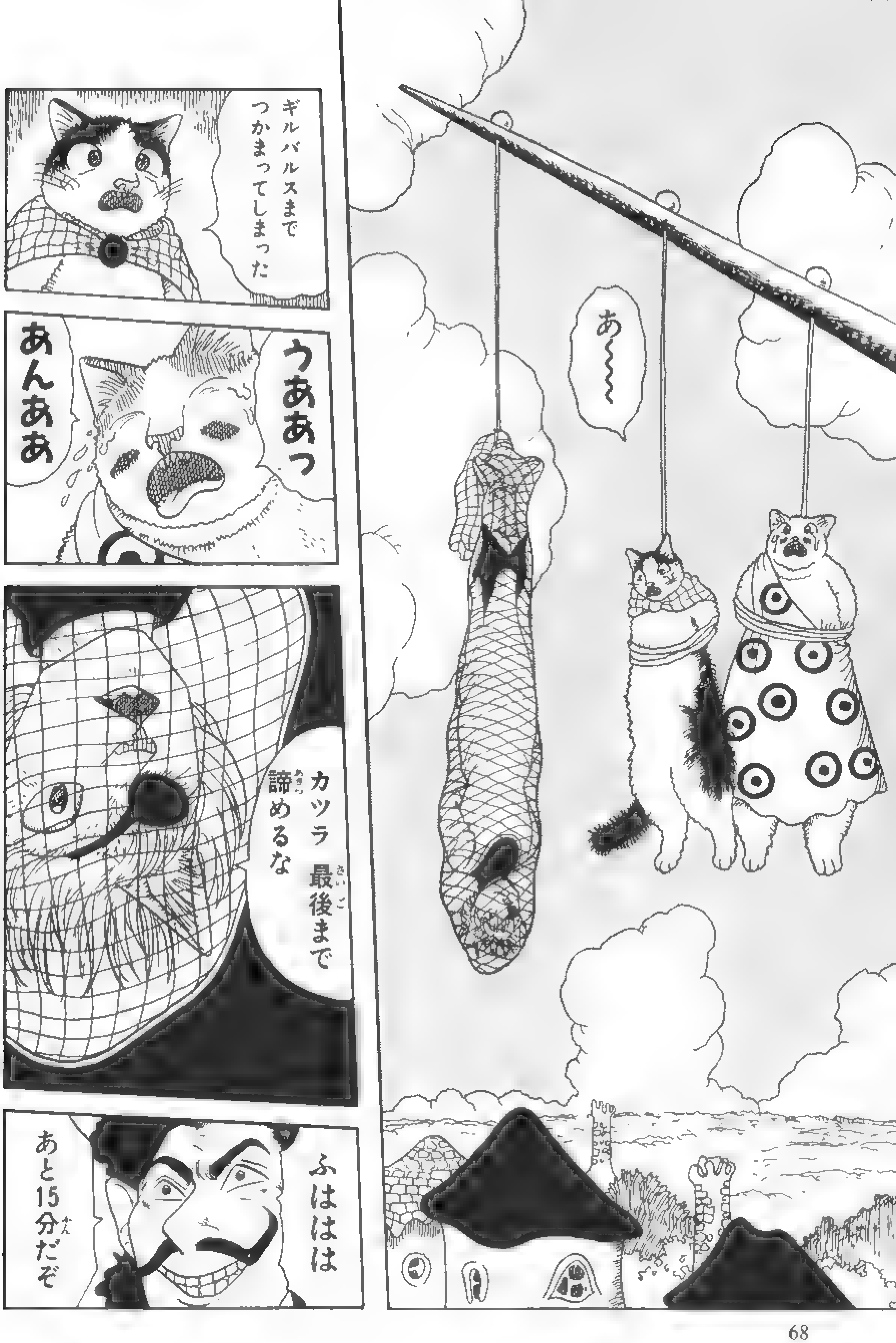

助けてくれーっ
うえーん 落ちるとペチャンコーーーッ
ヒデヨシの野郎どうして助けに来ないんでしょう
リンゴ丸でやった大食いくらべでカツラに負けたからだろう
それとコレとは別でしょう
オレたちの命がかかってんだから



そーいう区別のつかない奴なのさ
ぐーっ
ぐ〜〜〜ごあ
処刑やめろっ
ドラネコ団は関係ないだろう
そーだ
そーだっ
やかましい
愚民ども
ギルバルス
あっ



万動元帥
シュッ
ドラネコ団を解放しな
ぐっ
ギルバルスか
へっ
スッ
あっ
くっ


あ〜〜〜
ギルバルスまで
つかまってしまった
うああっ
あんああ
カツラ 最後まで
諦めるな
ふははは
あと15分だぞ


ヒデヨシ君起きてっ
ギルバルスもつかまったんですよっ
ぐ〜〜っ
こいつ一度寝たらなかなか起きないからなあ
どうだギルバルス
ワシの部下になるなら助けてやってもいいぞ
くそっ処刑開始
綱を切れっ
うわっ
バギッ
あっ
わーーっ


うっ
ああ


熔岩幽霊堂だ
凄いっ 熔岩のバケモノ
ヒデヨシ やっぱり助けてくれたんだね
これが熔岩幽霊堂か
こいつを思いのままに動かせたら透明王すら倒せるな
ヒデヨシは寝ているのに熔岩幽霊堂が勝手に動いてる
どういうことなんでしょう?
ぐーーっ


ひでよしノ心ノ奥ニアル良心ガ動カシテイル
ヒデヨシの良心!!
どらねこ団ガツカマッタト知ッタ時彼ノ心ノ奥デ助ケテヤリタイトイウ想イガ湧キ
ソノ瞬間熔岩幽霊堂ハコノ都ヲメザシテ動キダシタンダ
偉いぞっヒデヨシーッ
やっぱり助けたねっ
あれっ
寝てる!!


ヒデヨシの心の奥に
少し残っている良心が
助けたんだってさ
少し残っている良心…
あっ
ワーーイ
助かったあ
おーーっ
よかった
なあ
カツラ!
あれっ
ん?
モコ
モコ
やっぱり並の
良心じゃない



## 第四話　テルウテ⑨




シューーッ
シューーッ
う〜〜〜っ
よく寝たあ
凄い火山ガスだ
煙がこっちに来るぞっ
！
逃げろっ
この煙を吸ってはダメだっ


うわっーっ
毒ガスじゃないの？
なんだアイツら
ぜんぜんなんともないべよ
ふう
この辺まで来れば……
あれっ
その煙っ吸っちゃダメですよ〜〜〜っ
んっ
イエーーーッ
平気よ平気なのよォ


ヒデヨシ最高〜〜っ
仕事なんかどーでもいー
うわっ
馬鹿が伝染った
2日後
都からずいぶん逃げて来るな
ヒデヨシみたいになるんだもん
あの煙を吸った連中は…
わはは



仕事いや〜〜っ
イエ〜〜イ遊ぼうぜえ
飲みまくれえ
らっ ここも
わははは
ワシャあ法律屋じゃが
酒ちゅうものはんまいよなあ
この酒屋の酒はも〜っありませ〜ん
このやろ
働けっナマケ者
食堂のオヤジはたのんでも作らないし
酒屋も食い物屋もタダ食いされてるし
最低な奴らだっ


うくっ
腹へったなあ
ら
ヒデヨシは必ず来るっ
ハーーッ うめえ
万動元帥の野郎
フーム
サコ サコ
うっ
来たっ 網にかかった


はーい 万動ちゃーん
んまい物食ってんじゃないのさあ
今だ
撃てっ
ねえアンタ
「今だ 撃て」とか思ったでしょう
えっ
ホレ ホレ
丸太でぶちのめしておいたからね
ススッ
くそっ


うっ
くっそぉ
はーーっ
んめえーっ
おいっヒデヨシ
頼むむ
絶対鉱物ってやつを
一度おがませてくれ
ホーラ
これだわよ
なんという
妖しい輝き…
ヒデヨシ
オレと組まねえか
組んで
なにすんのさ
その宝石さえあれば
この国を支配
できる
王様になって
やりたいほうだい
できるぜ



王様なんて
どーでも
いいのさ
やりたいほうだい
なら
いつもしてるわよっ
くっ
団子ーっ団子ーっ
"じんだん団子"ーっ
10本一気食いしたら
タダだよ〜〜っ
10本
一気食い
したら
タダ!!
飛んで腹に
入る団子ちゃん
やります
10本
一気食い
えっ
本気かい


だいじょうぶかい アンタ
ふぐ
ぐふ
ハーイ
ぐっ
時間の隙間に入る呪文
言えるかい
もふっ もふっ
ヒデヨシ



眠れっ
ドッ
ぐっ
ダンナッ殺しちゃったんですかあ
睡眠弾だよ
おおっ…
素晴らしいっ
絶対鉱物を手に入れたぞっ



貴様っ
絶対鉱物をオレに渡せ
これはこれは万動元帥
絶対鉱物は我が脈旅団が手に入れました
あしからず
では
やってみようか
熔岩幽霊堂…
北へ移動せよ
ズズッ
ズ
おおっ
動き出したっ
それじゃあ
失礼
んっ


らっ
無いっ
絶対鉱物が
無いっ
くっそオ
万動っ
よくも絶対鉱物
盗んだなあ
なに言ってんだ
バカヤロ
盗んだのは
脈旅団
だろうが
そうかっ
鉄砂の野郎
くっすおっ
どこへ
行ったんだあ
あれっ
なんで
私は踊って
いたんだ?
うっ…ワシは
なにをしていたんだ?
ららっ
あっ
このっ
食い逃げ
野郎


ひえっ
だめだっ止まんないよーーっ
バキ
バキ
船が浮かび出したぞ
どうやらヒデヨシ君の身になにか起こったようだね
どうしたんだ
熔岩幽霊堂が都を出ていく


これで町にもどれるぞーっ
あ
リンゴ丸だ
あっ テンプラ君たちだ
なに?
あれは なんなの
ヒテヨシっ ゆるさんぞっ
金払えーっ
この食い逃げ ぶちのめして やるーっ
助けてーーっ
ダダダ
ドス ドス
うわあっ あんなに たくさん食い逃げ したのか


おおっ リンコ丸っ 早く助けてくれ――っ
ああ コノチへ 来るよ
仲間が助けに来たぞ
とんでもない奴らだっ
うーっ
食い逃げの片棒担ぎかあ
カツラ 早く乗ってっ
ヒデヨシが乗る前に扉しめるのよ
なんだとおテマリッ
飛べっ リンゴ丸っ
くそっ


さらばっ 諸君
このやろ 二度と 来るなっ
大ひんしゅく猫ーっ
よーーし 鉄砂の 野郎から 絶対鉱物を 取りもどすのだ
えっ 鉄砂に うばわれたん ですかっ
食い逃げして 町に迷惑 かけるよりましよ
確かに それは 言える
くっすおっ 鉄砂の野郎は どこへ行ったんだ
熔岩幽霊堂が 北に向かっていると いうことは… 北じゃないでしょうか
よーし 北だっ
しかし 鉄砂は 絶対鉱物で なにをする気 だろう


食い逃げに決まってんべよォ
断固ゆるせん
ゴーッ
ああ…
なんてことだ
ナバ のぞいてみろ
これは!!
宙臓ノ印


ああ…「鍵石ヲ求メヨ
街臓ノ印ヲ抱エテ
眠ル鍵石ヲ―
「ギリムリア神話」の鍵石って…!!
ああ 実在したんだ
絶対鉱石こそ鍵石だったんだ
すげえっ 鉄砂様
脈旅団の夢は……正夢になるんですなっ
鉱物が放射する能力を感じる我々にとって
ギリムリア神話の中に出てくる「ランダの門」は至福の夢だった
くぅ〜〜っ たまんねえっ ランダの門
いかにも
オレたちは鉱物師だ


でも鉄砂様
神話通りなら
あの門を鍵石で
開くのは
「散開女王」では？
そうだ
ナバ　おまえが
女王になるのだ
えっ
私が!?


おっ
ああ
ら
なんだアレは？
まるで…「ギリムリア神話」の


ランダの門


ホントだっ
ランダの門だ
北から
太陽が
のぼってるぜ
らっ
神話の
世界って
この向こう側は
幻覚なのか?
進めっ
つっこめっ
なんだ
これは!?
反引力だ
鉱物の力だよ
その時
不思議な
声がした


ヨウコソ
屈折率ノ界へ

# 第五話　テルウテ⑩





屈折率の異界!?
浮かんてるぞォ
気持ちいい――っ
ああ
空気が水のようだ
ホント空気の海、てすねえ


よーし
リンゴ丸
ゆっくり
着陸しろっ
あれ
なんだ
この感じ
オレの体が
ズレてるぞォ
ホホホッ
変な感じ
ああ
意識と体が
ズレている
これが
屈折率の
異界って
ことか？



不思議な感じだね
別なところから見ている世界
ああ気持ちいい
まるで自分が
光の粒でできているみたいだ
あっ
どうだ
屈折率の味は…
気持ちえーぞう


ところで鉄砂
絶対鉱物を返せっ
あれはもう誰にもさわれない
なんだと
う
シュー…
シュー…
ナバが鉱物化しているっ
あっ


鉄砂の体もっ
こらっ鉄砂
体が固まってるぞっ
いかにも望んだことさ
オレたちは永遠を見るんだ
！
みんなっここから早く出るんだっ


えっ
どうしてなのさ
ヒデヨシ自分の体を見ろよっ
ら
体から石が吹き出してるぞっ
だめだっ鉱物化してますよっ
こらっ鉄砂止めてくれっ
うろたえるなヒデヨシ
永遠が味わえるんだ


永遠なんかどうでもいい
ああっ体が動かない
助けてくれえ
ダメだ
崩壊の呪文が効かない
おおっ
感動的


私が鉱物に包まれるっ
ああっ
鉱物に包まれるにつれて……
意識の浮遊が消えた
ぐわあ たいくつだっ
月光を楽しみたまえ
月光？
やがて月が浮かんできた


ああ……
月光が体の中を
通りぬける時
その輝きは
屈折して
旋律になった
凄い


なんて気持ちのいい月光…
月光が体の中を曲がっていくのがこんなにいい気持ちだなんて…
素晴らしい旋律…しびれます
それにしてもなんなのだろう
この不思議な輝きは?
体が鉱物になっていくと感じられる
この輝きの紋様…
これは


鉱物たちが見ている夢だ
ああ気持ちいいこのままオレは永遠にここに……
テンプラしっかりしろっ
こんな鉱物の沼におぼれるんじゃないっ
ズ


ギルバルス
すでにランダの門は開いたのだっ
我々が浴びる鉱物的快楽を誰も止められない
おまえたちだけの楽しみならばオレは関わらない
だがオレには聞こえるんだ
ナバの悲鳴がな
なんだと
ナバが悲鳴を上げているというのか？
んっ



たいくつだあーっ
パ
あっ鉱物を砕くなんてっ
こんな石に包まれてジッとしてるなんてやってられないわっ
ナバだってたいくつで悲鳴上げてんのさっ
そんなはずは……
おんや ナバちゃん
なあ ギルバルス


ホラ
別に悲鳴なんて
上げてないそう
耳に聞こえる
ものばかりが
悲鳴じゃない
あっ
にやっ


助けて
誰か助けて
なんだっ
あの青黒い
ドロドロはっ
絶対鉱物に
封印されて
いたものが
吹き出して
きたんだ
ナバしっかり
しろ
くっすおっ
ギルバルス
どうすりゃ
いいんだっ
オレの合図て……


ピリーーッ
ズッ
そーーっ
よし 今だ
ガッ
いただき


くっ
よーし ギルバルス
今止めてやるぜ
あれっ 止まんないぞ
こらーっ
だぞっ
ギュッ
ぐ
ビッ



面白イ
オマエノヨウナ奴ガ
王様ダッタラ
食イツクシガイガ
アッタナ
なんだ
おまえはっ
あーっ
このバケモノがーっ
しかもなにが
食いつくしがいだ
オレが
ひとかじり
してやるぜ
!
ヒデヨシ
逃げろっ


来ーーいっ リンゴ丸っ
キャーッ
凄い勢いだ
おおっ
これは…


森がどんどん鉱物化してる
あの青目玉のバケモノめ
やるじゃねーか
しかしギルバルスとうとうふたりきりになったねえ
ふたりきりじゃないぞ
おーいヒデヨシ君
あっギルバルス
げっテマリ


どーーーして
テマリ
水晶づけに
なんないのよォ
ドラネコ団
みたいにさっ
時王と船室に
かくれていたのよ
あっ
あっ
このやろ
門の
ぶんざいで
行けっ
リンゴ丸


ランダの門を成敗しろっ

# 第六話　テルウテ⑪




撃てーっ
門なんかぶちこわせっ
ドドッ
撃ちまくれえっ
ぐわっ
あっ
ヒデヨシ


にあっ
ぐっ
ドッ
ヒデヨシ撤退しろ
ほっほっほっ
絶対に撤退なんかしねーぞォ
オレには絶対鉱物があるんだ
よーーーし熔岩幽霊堂
ランダの門をぶっこわせー


しーん
ぜんぜん動かねぞォ
くっすおう こうなったら
ら
てったいなのよーっ
うー
どうなったんだ絶対鉱物
ぜんぜん力なくなったぞ
輝きも弱くなっていますね
あの青いドロドロのやつがその中から出たせいかも知れない



なんだとっ
おのれっ
あの青ドロドロ この中に押しこめてやるぜいっ
青いドロドロ？
そーなのよ 目玉のついている奴
なあ ギルバルス ありゃあ なんなんだ？
判らない…
だが恐ろしい力を持っている
ああ 凄い


あたり一面
鉱物化が広がっている
なんだ あのあたり ミカン色になってきたぞ
ズーン
にゃあーっ


噴火だ
わおーっ
噴けーっ
噴けーっ
なんだ この噴煙
鉱物の
粉だよッ
なんだろう
この感じ
ら


うっ
どーしたんだ みんなーっ
だめだっ 噴煙をさけて 風上に
なんだろう この胸の中に 湧いてくるもの…


憎しみだ
憎しみ
ああ
そうだ これって 憎しみ…!!
あの噴煙は 憎しみの噴煙だ
どかん どかん 噴火してるぞ
パキ
パキッ
おお
2日後


憎メ
ユルサナイ
ズゴゴゴ
絶対ニ忘レナイ
憎メ
憎しみの都のような山だな……
ユルスナ
憎め憎めって
うるさいねえ
しかし
おまえの憎しみってなんだ?
フーム
いったいなにが憎いのか…?


おまえに聞くだけムダだな
ほんじゃギルバルスの憎しみってなんなのさ?
憎メ
憎しみは他者に話すものではない
口が堅いと
心がつかれるぜ
憎シミヲ忘レルナ
おっ いたいた


ダメだな こりゃ 完全に 鉱物だぞ
よしっ 足元をけずって リンゴ丸へ 運ぼう
むがむががっ
凄い力だなあ
やっぱり重いぜっ リンゴ丸呼ぶべ
噴煙がひどいから 船は近づけないぞ
うっ


オイ でぶ猫
嘆キノ素ハ 私ノ物ダ
あっ コノヤロ でかくなってるぞ
嘆きの素だと
オマエタチガ 嘆キ苦シムホド 私ハ大キクナル
!


うっ
想イ出セ
誰カヲ本当ニ憎ンダ事ヲ
決シテユルサナイト憎ンダ事ヲ
あっ
ギルバルス


こらっ
しっかり
しろっ
なさけない
奴だなあ
情ケナイ
ノハ
オマエダ
憎シミ
ヒトツナク
くらげノヨウニ
ユラユラ
笑ッテイル
馬鹿生物
なんだとォ青目玉
ゆるさんぞ


これでも
くらえっ
仲間ノ体ヲ
丸太ノヨウニ
アツカウトハ
シュッ
ぐっ


タイシタ鬼畜猫ダ
キャーーーッ
ホラ
オマエノ憎シミヲ想イ出セ
らっ
にっ
憎い
憎いのよオオ
ヨオシ…オマエノ心ノ中デ
一番憎イモノハナンダ


くっ
くぬやろォ
絶対ゆるさないかんな〜〜〜っ
ナンダ
コレハ?
太陽ジャナイカ
そうよっ
お日様が憎いのよっ
太陽ガ憎イダト?
そーよっ
ゆるさないのよっ
ン
憎シミノ原因ハコレカ?
そーよォ
お日様のせいで



腐るのよ〜っ
魚やタコを盗んでかくしておくと腐るのよーっ
お日様が憎いーーっ
コノ愚猫
消エロッ
キャーーーッ


痛でっ
くっすおっ
青目玉っ
ぶちのめしてやるっ
ら
腐ったタコを見たら腹へってきた
いえ〜っ
リンゴ丸
えっ


ギルバルスも鉱物化!?
そーっ カッチン カッチン
「助けてくれヒデヨシーッ」なんて叫んでオレにすがりながら泣いたのよォ
おまえ
でたらめ言うんじゃないよ
泣いたのはウソだけど鉱物になったのはホントだぜ
となると苦しい状況ですね
ああ ギルバルスもやられたんじゃどうしていいのか…



安心しろ
オレがいるんだ
さーテマリ
飯だっ用意しろ
なに言ってんのよ
なにかというと
飯飯っ
あれっ
なんだ
あの狼煙
みたいなの
あの紋様…
なにかで
見たような…
フーム
狼煙の
出所は!?
らっ


ツキミ姫だっ

# 第七話　テルウテ⑫




あらら
ツキミ姫の腹からモコモコと……
なんだろう あの紋様?
アレ どこかで見たこと あります
なんなのだ 想い出すのよォ
その声を聞くと想い出せません
しかし
なんで狼煙なんか上げてんだろ?


私たちに なにか
報せようとして
るんじゃないかな
ら
ぐっ
娘
ナンノ
マネダ
コレダケ
結晶化
サレテモ
マダ動ケルトハ
完全ニ
水晶ニ
シテヤロウ


ふっ
ウッ
貴様
オイアノ
紋様ハナンダ?
教えて
あげません
ナンダト
じゃあね
ふう


イエ〜〜ッ ツキミ姫ーーっ
ねえ 胸から出た あの紋様
あれは なんなの?
水晶化して 憎しみいっぱいに なった時
憎しみの向こうに 見えたんだよ
憎しみの 向こうに…
ねえねえ あの紋様 どんな形 だったっけ?
たしか


う―
どこかで見たことあるんだけれど……
鉱物の中にある紋様なのかなあ
ふーっ想い出せない
時王って憶えが悪いのねぇ
おまえにそんなこと言えるか
憎イ、
憎ミマス
頭がズキズキする…



憎しみが入ってくるからだ
よーし 唐あげ親父をこの船から放り投げよう
なんてこと言うの!!
だってよーっ 足元から水晶が広がっているんだぜ
リンゴ丸が憎しみ水晶でいっぱいになっちまうのよっ
こらーっ絶対鉱物なんとかしろーっ
この役立たずがっ
あれ
まだ持ってたんですか
ソレ もうダメですよ 青いドロドロの奴がぬけ出したら鉱物気配が消えて
セミのぬけがらみたいなものですよ
あっ


熔岩幽霊が
こっちへ来るぞ
ら
なんて
動き出したのよっ
あっ
青目玉のドロドロ野郎が
顔面に——っ
アイツが
動かしているのか


絶対鉱物ヲ ヨコセ
ぺっ
こつけな役立たず くれてやるぜっ
ダメよ ヒデヨシ君
渡しちゃ ダメ
どうして ダメなのさ
なんの力もなくなった タダの石ころなのよっ
でもタダの石ころなら アイツが欲しがるわけないですよ
なーーるほど
こらっ 青ドロドロ
絶対鉱物は 絶対 絶対 渡さねえよっ



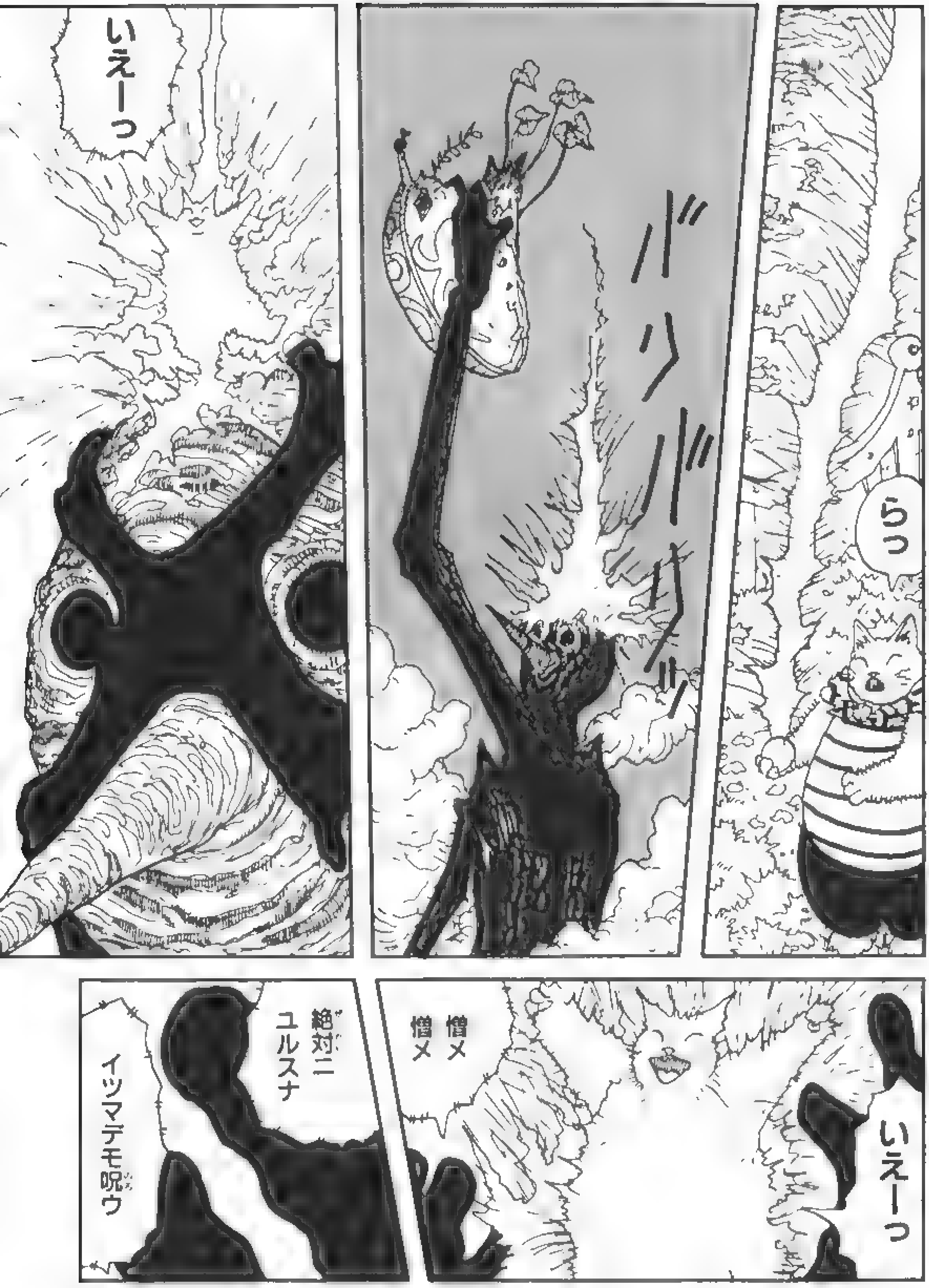
ボッ
うわっ
ゴーッ
熱風だっ
オレは言うことキカン猫リンゴ丸っつっこみながら
撃ちまくれえ
ド・ドン
ヒデヨシ君熔岩幽霊堂からもっと離れてっ
ゴォッ


熱っ
あっ ヒデヨシ君
ヒーーッ
逃げるのよ〜〜っ
くっすおっ 青ドロドロの野郎ーーっ
ツキミ姫の言うこと聞かないからヒゲがチリチリ
コノヤロ なにがおかしいっ
あれっ
絶対鉱物が赤く輝いて……


狼煙の紋様が
いったいどうして?
たぶん熱せられたからだよ
うっ
判った
これ古代の結晶記号の集まったものだ
古代の結晶記号?
ああ
バン・ソラジュ・アウセ・ベダリ
素晴ラシイ
ソノ紋様ヲ読ミ解クトハ……


鳥 あっ
ダガ らんだハ
モウ絶対鉱物ニ
帰レナイ
ランダ!?
あの青いドロドロの
奴がランダなのか
アア
奴コソ
憎シミノ
生命体
どうやったら
あいつを
ぶっ倒せるんだ?
奴ハ倒セナイ
奴ハ永遠……
ソシテ
子供タチ
オマエタチモ
永遠ダ
健闘ヲ祈ル
鳥 あっコラ


おわっ
パキ
パキ
憎メ
憎メ
ねえ
時王っ
その結晶記号
もう一度読んでみて
アウセ・ベダリ・
ブンガ・シイム
らっ
パチ
パチ
一緒に
ヒデヨシ君も
この言葉をっ
バン
ソラジュ
アウセ



らっ
バンドガ
いえーっ
いえーっ
憎メ
憎メ
絶対ニ
ユルスナ
イツマデモ呪ウ



うっ
シュル
シュル
うわっ
パキ
ダメだっ
くそぉ
生キル事ハ憎ムコトダ
パキッ
憎ミ続ケルタメニ
オマエタチハ生マレテ来タノダ
いやだ



憎しみなんか
越えて行くのよォ
クソォッ
ナゼダ?
ナゼ
オマエハ
憎シミニ
飲マレナイ
ノダ
サワルトちかちかスルこれ?
コノ胸ノ
奥ニアルノハ
イッタイ?
ほほほ


ほれほれっ
ウッ
ドンドコ
ドンドコ
ウワッ
ドンドコ
ドンドコ
あっランダが食われている
おっ


ヤメロッ
ウアア
ドンドコ
ドンドコ
パキ
らっ
絶対鉱物が
割れたっ
熔岩幽霊堂が
ああ
さあ
行こう



憎しみの時間を
ドンドコ
シューーッ
ドンドコ
越えて行こう
シューーッ
シューーッ
あんな嘆きと憎しみの山なんか
憎メ
憎メ
ドンドコ
おお 結晶が解ける
うう
さあさあ
こんな憎しみの山なんか
ドンドコ
ドンドコ
あっ


山体崩壊だ
アタゴオル
いえ〜〜っ


テンプラは
あれいらい[redacted]々
風の中に
あの山の気配を
感じるのです
あそこに
ふみまよい
出られなくなる者たち
胸を凍らせ
拳を握り
続け……
でも
だいじょうぶ
オレは[redacted]だ
忘れていない
ずうっと
昔


憎しみなんか知らなかった時間…

# 第八話　湯煙釣り




ふーっ
湯煙森かぁ
ザーッ
わーーい
ザーッ
まったく温泉だらけだねえ
トリキリ・トウ鳥の力は一時だと思っていたが
やっぱり鳥霧山の火山の恩恵ですねっ
そうだねしかし
ずいぶん見なれない顔がいるなあ
湯煙森が有名になって遠くからやってくるみたいだぞ
おお湯煙アタゴオル
ありゃ
また看板だ


「風呂に入ってる時 服や お金を盗む この男に注意」
ザッ
「唄などを勝手に唄い お代を請求したりする 近づくべからず」
ハア〜〜ッ お湯はタップリコ 熱カンぐっぴりコ
ゆでタコくんねりコ ほえほえお初ーっ
あらっ 噂の ヒデヨシ じゃないか
へったくそっ そんな唄に 金なんか 払わないぞ
ほほほ いらない わよ〜っ


これこれ
ヒデヨシ
旅の方に
唄の押し売り
するんじゃないよ
してないわよーっ
すでにオレの唄は
買われているのサ
おまえの唄が
買われてる?
誰が
買ったのさ?
秘密なのよ
唄い続ける
オレの道ーっ
酔狂な奴が
いるもんだなぁ
まったく
しかし
お湯が湧くのは
いいけれど
釣り好きには
つらいよなぁ
この辺じゃ
魚が棲めなく
なってるからな
んっ


こんにちは
釣れますか
釣れませんなぁ
この川の水は
温泉水だから
魚いませんよ
御忠告
ありがとさんよ
プイッ
ありゃあ
「んなこと
知ってるよっ」て
態度だな
お湯の中からなにを
釣ってんだろう？



おかしなメガネをかけてたが
アレに秘密があるかもな
らんらら
らんらん
あっ
ドラネコ団とテマリちゃん…
はんにゃらほんにゃら
へんにゃらふんにゃら
……
湯が湧くようになってから時々あんな風になるのが
うーっ
お湯の成分に変なのがまじっているのかなぁ
イエーーッ
乗ってるねい



唄えば楽しタコの風呂
ジャカ
ジャカ
ジャカ
ツ
はんにゃらほんにゃら
ニュルニュルつるつるペッタラコ
あれ
とつぜん記憶がなくなって……
ああっなんでこんな所にいるんだ?
うっ
なんでヒデヨシなんかといるんだ?
変だなぁ



気にすんなよ オレなんて しょっちゅう 憶えてないぞ
記憶なんて 生きるジャマだぜい
いえーっ 唄のお代を
おう 約束の 銅貨5枚…
明日もたのむぜ
まかせて よーっ
3日後
さーて


今日もドカーンと行くかあ
ありゃ？
口笛なんか吹いちゃって
なぬ？
口笛吹くと忘れるのか？
記憶喪失の原因を調べているのさ
ドラネコ団はみんなで口笛吹いていたらしいし
腹まきウドン屋も口笛吹いて歩いてたらしいのさ
ヒデヨシも吹いてみなよ



スー
そーかおまえ口笛吹けなかったんだっけ
ぶきっちょうな口だよなあ
フン なにさ
スー
ふっ
あれっ
バシャッ
ギン


はんにゃら
ら
ほんにゃら
どうしたんだ おまえたちっ
なに───っ
さーっぱり 憶えてないぞ
見たべよっ お湯の中から 黄色い 枝みたいなのが 出たべよ
そんなの 知らないぜ
なんて 憶えの 悪い奴らだ
ヒデヨシに 言われる なんてなあ



枝みたいなのが光って急に踊りだしたなんて…
一種の催眠光線みたいなものか
！
ひょっとして…
あの釣りしている赤帽のオヤジ
その催眠光線をかわすために変なメガネかけてるんじゃ!?
なぬ？赤帽の釣りオヤジって
オレよ そいつに頼まれてお湯の川にそって唄ってるのよォ
ええ!?
イエーーッ オヤジーッ
黄色い枝みたいな奴はなんなのよーっ
うっ おまえ その目で見たのか!?
見たのよっ なんなのよっ


あれは神経質な奴でな調子っぱずれの大馬鹿唄などを聞くと 逃げるのさ
馬鹿唄聞くと逃げる？
それでヒデヨシを追い込み役にしてたんですね
フッ
まあな
そのメガネは催眠光線をかわすためのものですか？
フッフッ
オヤジさんよっ オレたち そいつを呼びよせる方法を見つけたんだぜ
ホントか
ようし カゴの中にメガネが入っているからつけな



スー!!
口笛に寄ってくるとはのう
おやじさん針につけてるのは？
湯華に砂鉄!?
ろくでもないエサだなあ
湯華に砂鉄を混ぜたものさ
んっ


来たっ
ザウッ
おっ
やっぱり催眠光線だ
ホホホッ
たーっぷり生食いしてやるわよ〜〜っ
フッ
食えるもんなら食ってみな


やめろ ヒデヨシッ 見たことのない 貴重な魚を
がぶっ
うげっ なんだ この味はっ
硫黄だよ その魚は 硫黄でできて いるんだ
硫黄!?
確か幻の魚の中に そんなやつが…… ペシッカウ雷魚とか
ほう…よく知って いるな お主
いかにも こいつが 温泉水に棲む幻の魚 ペシッカウ雷魚さ
けっ 食えない魚 なんて 魚じゃ ないぜっ
さあヒデヨシ いよいよおまえの 出番だぜ


おまえの得意な唄を
心を込めて
雷魚に唄ってくれ
ほほほ それは
最近作った「びっくり音度」
ハア〜〜ッ
夜中にタコが
やって来てえっ
食った吸盤
返せよとォ
オレの胃袋
まさぐったあ
ぐりぐり
にゅーるん
ちゅうるちゅる
雷魚が
いやがっている
魚だって
聞きたくないよなあ
ハア〜〜ッ
びっくり吸盤
酢っぱくてえ
ほんでもって
ドロドロ
溶けちゃってえ



パ
らっ
よっ
鱗花火
鱗がっ
あっコノヤロ
逃げたぞっ


鱗のとれた奴に
用はない
鱗の半分は
おまえにやろう
残りはワシの
ものじゃ
なぬ？
この鱗……
いざ
サラバじゃ
なんだよ
あのオヤジ
鱗なんか
もらったって
しょうがないだろう
かたくて食えないし
おまえって
ほんとうに
他猫の話
聞いてない
奴だなあ
なにか
言ってたか


「鱗の上に針をさすか月光や日光に当ててみなっ」て…
針をさすって…こうか…
イエ〜〜〜ッ
4日後
東向きに置かないと…
これでよしっと
ヒデヨシ君朝日が出ます
鳥霧山から朝日がのぼり
そしてシンとした森に


ハア〜〜ッ
夜中にタコが
やって来てえっ
食った吸盤
返せよとォ
くーっ
カッコイイ
ハアーッ
夜中にタコが
ハア〜〜ッ
夜中にタコが
オレの胃袋
まさぐったあ
お早うございます
歌手の
ヒデヨシで
ございます
このやろっ
何時だと
思ってんだっ
ウロコに録音した
「びっくり音頭」
1枚たったの
7銅貨です
だがこの鱗
評判がいい…
買った者は
それを
裏返して
置くのだ
すると



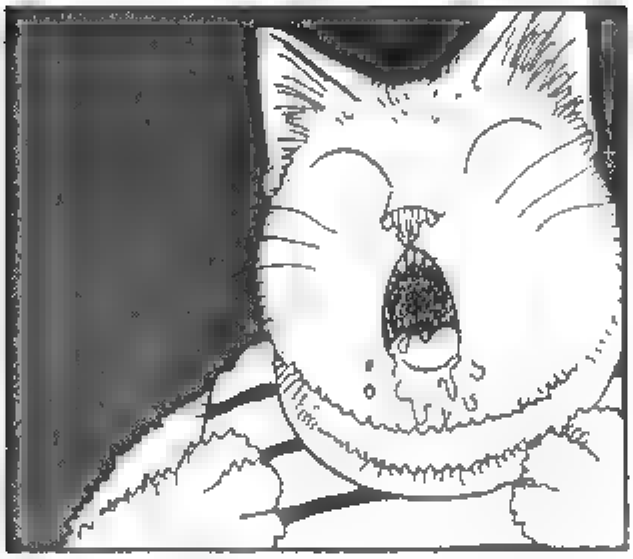

アタゴオルは猫の森⑤ おわり

ますむら・ひろし先生の最新情報はホームページ

「ごろなお通信」

をご覧ください。
イベントや新刊の情報、ファンと先生の
交流の場となる掲示板など、楽しみいっぱいです。

http://homepage1.nifty.com/goronao/



# アタゴオル余波5

ますむら・ひろし

漫画というものにハマッタのは、小学校の低学年。その頃週刊誌はまだなくて月刊誌の時代で、最初買っていたのは『ぼくら』だった。いろんな付録のはさまった本は、まるで筋子をはみ出させた鮭の親分みたいで、その分厚さにワクワクしたものだ。僕の購読本はまもなく『ぼくら』から『少年』に移ったのだが、本が家に着いた日の興奮、そして全部読み終えたあとの、「あと一カ月どーすりゃいいんだ」という寂しさ。指折り数える発売日、配達される日に走って帰る下校の道。漫画本はほんとうに喜びをくれた。そうしたなかでも、一番のお目当ては、横山光輝先生の『鉄人28号』。鉄人こそ、僕の最初のヒーローだった。バッカスのヌルッとした曲線の気持ち悪さ、ブラックオックスの押し黙った重厚な強さ。巨大蟻の出てくる事件で知った蟻酸という言葉。こうして僕にとって鉄人は漫画の世界に居るのではなく、現実の世界に居る状態だった。

その頃クラスにH・M君というこれまた熱狂的な鉄人フリークがいた。H君の家でふたりで鉄人の絵を描いたりして、鉄人の世界に渦巻きのようにのめり込んでいた楽しい日々のなかで、ある日H君は僕に言った。




「あのよ、オレの家の隣りに工場あっぺ。あそこで何作っているか知ってるか」。

「知らね。何作ってんなよ」。するとH君は、こう言ったのだ。

「鉄人の新しいヤツ」。僕は頭の中が破裂するほど驚き、それからワクワクした。

「オレ見たんだよ、鉄人が作られているだ　いいか、誰にも

言うなよ、内緒だからな」。この誰にも言うな内緒だぞという言葉は、僕たち二人だけが物語の中に居るようで、米沢の子供たちが誰も知らないことを、僕らは知っているようで、めちゃくちゃ興奮した。こうして二人だけの会話は毎日のように秘密のなかであり、H君の口から時々「今、足の部分が出来ているんだ」とか「首は完成している」とか新しい情報を聞くたび、僕は「ああ、いいなあ、見たいなあ、鉄人」と、うらやましがった。そしてH君はある日、「そのうち、お前にも見せてやるよ、完成したらな」という驚きの言葉を言ったのだ。

　ああ、凄い、生の鉄人が見れる。こうして僕は下校の時間になると一緒に帰りながら、「完成はまだか」という催促をするようになったのだが、だんだんH君の口は重くなり、ズルズルと鉄人の完成はのびていき、たぶんH君は僕を避けるようになっていったのだ。そうして季節も変わっていくなか、僕のなかに「鉄人って、あの工場のなかになんか、居ないんじゃないか?」という疑惑が湧いてきた。それは小学生の低学年の子供が急速に成長し、漫画の世界と現実の世界が「溶け合っている」時刻を過ぎていく時期にさしかかってきたためでもあった。そうして僕の頭のなかでは、鉄人があの工場に「居て欲しい」と「居るわけがない」の2つの想いに割れて、居るわけがないという気持ちがだんだん強くなるなか、僕はどうしても答えを知りたくなった。そしてある日、H君をふくめた数人の友だちと歩いている時、僕は決心してみんなに聞こえるように言ったのだ。

「H君の家の隣の工場でよ、鉄人28号の新しいやつが作られているんだよな」。その瞬間、誰かが言った。

「馬鹿だなあ、そんなことあるわけないだろう、鉄人なんて漫画の世界だよ、なっH」。その時H君は黙って、寂しそうに笑ったような気がする。がらがらと歩が崩れて、あの工場がどんなお城よりも凄みを持っていた姿が消えていくな



かで、「馬鹿だなあ、漫画だよ」と答えた友だちの、そのアッケラカンとした声が、僕には憎らしかった。自分たちの夢の時間を、馬鹿呼ばわりした大人びたその声に、夢の最期が告げられたことを憎んだ。

H君は、漫画の上手い子で、将来は漫画家になるんだと言っていたが、クラスも別になり疎遠になり、鉄人の人気は僕のなかで『伊賀の影丸』に移っていき、突然ラジオからビートルズが聞こえ、僕は漫画より音楽に夢中になった。

ふたたび漫画を読むようになるのは、石田国松くんの『ハリスの旋風』、そして2度目の夢中は、矢吹丈の『あしたのジョー』だった。高校二年の僕にとって、ウルフ金串戦こそ、結果が気になってどうしようもない人生最大の待ち遠しい一週間だった。あの暑い夏、友だちとジョーが勝つ方に50円のアイスクリームを賭け勝利はしたが、ほんとは負けるかなあとハラハラしたものだ。そして力石徹戦が続くころの放課後の教室。本屋よりも一日早く発売される米沢西駅の売店まで走って今週号を買ってきた小林孝二は、教室に入るなり言った。




「力石、死んだぞ」。

高校生の僕は、もはや鉄人の工場製作を本気にするほど夢見る時期は過ぎていたので、力石の死は、物語のなかの死だったが、それでも「なんで、死ななきゃならないんだ」「この先、ジョーはどうすればいいんだ」という戸惑いの中で、「死というものは、これほど突然やってくるものか」と胸を叩かれたような衝撃を感じ、「ええっ、嘘、力石が死んだのかあ」などと狼狽えていると、読んでいない女子たちが「なに、漫画の話なのー」と呆れていた姿が印象的だった。




こうして僕の漫画の道には、『鉄人28号』と『矢吹 丈』とい

うふたりのヒーローがいた。僕はものを作る者にはナリタイと思っていたが、横尾忠則さんや伊坂芳太良さんといったイラストレーターが輝いていたあの時代、漫画家にナリタイという意識はほとんど無かった。だが不思議なものだと思う。ナリタイものは横滑りして、いつのまにか漫画家になっていたのだから。

僕を興奮させた鉄人というメカ・ロボットものは、今日でも漫画のジャンルのひとつだし、矢吹丈が戦ったスポーツものも、漫画の重要なジャンルなのに、僕がそうした域には行かず、見つけだした世界は、アタゴオルやカリン島やロバス島やラビットタウンといった精神空間だった。

そして、鉄人と矢吹丈への感動の果てに出現したキャラクターは、ヒデヨシだった。少年漫画が抱えている戦いと勝利と敵といった題材。ギルバルスなら順当にそうしたテーマの域に行くのだろうが、僕にとって戦う少年に対してのアンチとして、テンプラくんは、ホヨヨンと七十年代後半に立っていたのだ。明らかに、勇んで戦場に行く馬鹿や、巨大な爆風が次々とでかくなる物語に、僕はウンザリしていた。こうして戦場からの逃亡、リングからのズラカリ、男同士の汗と友情に対し、ヒデヨシは怠惰な汗と食欲的な裏切りで存在し、僕は旅してきた。今回、一年かかって描いた『テルウテ』についても、こうした僕の願望は露呈して、ヒデヨシと鉄砂は戦いのなかで、結局は激突しない。なにゆえ、人間は古代から今もなお、馬鹿げた戦いを続けているのだと、やはり呆れるしかないのだ。人間は、攻撃されれば反抗し、挑発すれば怒り、実に単純な神経の生物だ。だからこそ、昔からそうした神経をツック作品を描こうとして、たくさんの作品が生まれてきたのだろうが、やはり僕は、温泉に入ってボケーッとしている世界を、作品の



なかでも味わいたいのだ。

子供の頃、月光仮面や少年ジェットや風のフジ丸や七色仮面、強いヒーローにわくわくし、得体の知れない悪に震えたり怒ったりした。だが不思議なことに、二十歳すぎた僕のなかでそうしたヒーローに対し、不思議な寒気がするようになった。時代劇などで、主人公の振り回す刀で、あっというまに切られて死ぬ名も無き下っ端。それを見た時、「この人にも家族や親がいるのに、こうしてあっという間に死んで、可哀相だなあ、どうしてもすこしこの人にも、生きざまのあるシーンがないのだろう」という思いが湧き、マヌケそうな正義感で刀振りまわしている主人公に、後ろから「天誅」加えたい衝動にかられるようになった。その瞬間、僕のなかでギルバルスの胸を、ギューッとモミモミするヒデヨシはわき上がってきたのだろう。




ヒーローは時代と呼吸しあう。子供にとって、いつまでも強い正義はヒーローだろうが、ヒーローの発散する力の持つ恐ろしさは、ヒーローの視線の角度が狂った時に、立派な地獄を作るということなのだ。

そしてその地獄は、どんなに明るく正義の唄で満ちていようが、やっぱり地獄にすぎないのだ。いっけん平和なこの時代には、冗談や笑いが沢山あるが、そうした笑いが不謹慎になる時期にこそ、笑いは試されるのだろう。



（初出）コミックフラッパー 2002年8月号～2003年3月号

MFコミックス
アタゴオルは猫の森……………5

2003年3月31日 初版第1刷発行

著者……………ますむら・ひろし

発行人……………松岡博治

発行所……………株式会社メディアファクトリー
〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
TEL 0570-002-001 03-5469-4760(編集)

印刷・製本……………大日本印刷株式会社


ISBN4-8401-0483-2 C9979